

■今月の特選句

2015年2月

あばれ独楽回転不足取られけり

工藤泰子

独楽の競技では何を競うのか定かでないが、回転不足と言われれば、何となく納得させられるところがよろしい。「過疎の村開店不足してゐたる」。

ふぐ料理毒よりこはき時価の文字

金澤 健

「ふぐ喰ふに気象予報士の名を唱ふ めったに当たらぬ人を選んで」「ひどいこと値札のゼロを見落として 値引きをせよと時価談判」。

直ぐ帰るインフルエンザの見舞い客

小泉花子

咳が出ないから菌をばらまいてはおらん。ゆっくりしてくれよ。かまわん課長には俺が電話しとくよ。「またひとり風邪の患者の増えること」。

裸木に数多の股のありにけり

久我正明

「木のついて裸は冬の季語となる」。というわけ。裸木に股を見つけるという可笑しさ。「指ソックスにも数多股穴」。

寒鯉の動かぬといふころざし

宮森 輝

動けぬを動かぬとした詩の心。擬人化をして出来た句だろう。「刻一刻鯉こくなる刻迫る」「温顔の平然捌く冬の鯉」。

見て見ぬ振りハトが教えてくれた

鈴木和枝

「季語のない五七五に候へど どこかに滲む哲学てふもの」。八木健がかつて作った句の中に、「どの鳩もうなづき歩く小春の日」がある。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

- 鮫鱈を聖者の如く吊りにけり
・・・二度と鮫鱈などに生まるな
飯塚ひろし
- 生命線二つもあつて日向ぼこ
・・・泪目ゆえに二本に見える
加藤 賢
- 爛酒の少しさめきて矢代亜紀
・・・舟歌歌う爛はぬるめと
西をさむ
- 梅ひとつ活けて懐石割高に
・・・女将の笑顔だけはサービス
有富洋二
- 冬服の黒で固めて誤解生む
・・・反社会的団体めきて
山本 賜
- 煤逃げをするほどの掃除誰もせず
・・・季語の行事は歳時記だけに
奥脇弘久
- 詰め放題袋の底に泣くみかん
・・・ジャムになるかも知れぬぞそれは
寿命秀次
- 新年やギブスの足の退屈さ
・・・目と耳だけはテレビに使い
井野ひろみ
- 寝疲れをしまひたる三が日
・・・いいんじゃないの正月ぐらい
日根野聖子
- 遅れ来て上座に先生忘年会
・・・師が早く来ちゃ格好悪いよ
稲沢進一

マスクして終日怠け者となり

・・・マスクはずして癖が抜けない

入江澄泉

数の子の音を食ふべし味はふべし

・・・幸い歯だけ丈夫なんです

井口夏子

丹前の上司マイクを離さざる

・・・下手でも褒める優しい部下よ

小林英昭

■今月の滑稽句

- | | | |
|------|---|-------------------------|
| | 嘘を言う口を塞いで初閻魔
若水で去年の顔を新たにす | 青木輝子
青木輝子
青木輝子 |
| 【佳作】 | 不機嫌な夫(つま)の妙薬爛の酒 | |
| 【佳作】 | 傘といふ字に似せ松を冬に伐る
鴨並び小岩のごとき里川で
餅花や季が過ぎればあられ菓子 | 青山桂一
青山桂一
青山桂一 |
| 【佳作】 | 大寒波猫は爺に抱かれて
天眼鏡手にゆったり坐る炉端
年女酒に弱くて酌ばかり | 秋月裕子
秋月裕子
秋月裕子 |
| 【佳作】 | 錦織を語る松岡息白し
つつがなく七草粥を夫が炊き
手をつなぐ方の手袋嵌めずをく | 麻生やよひ
麻生やよひ
麻生やよひ |
| 【佳作】 | すき焼きのリレーで廻る玉子かな
探梅に来て落し物探しをる | 有富洋二
有富洋二 |
| 【佳作】 | マドンナの隣へ座る年忘れ
初富士をひよいとつまんで向きを変へ
時間長者たちの集ひし日向ぼこ | 有吉堅二
有吉堅二
有吉堅二 |
| 【佳作】 | 四季の花ごちやまぜ初売り花屋かな
菊とチューリップ並べて活ける春
投句入選遠く春遠く | 粟倉健二
粟倉健二
粟倉健二 |
| 【佳作】 | 二日はやエホバの教へ説く女
茶碗酒ぐいと呑み干す女正月 | 飯塚ひろし
飯塚ひろし |
| 【佳作】 | 泣く子のたれ目上がりてお年玉
願ひ事深く念じて去年今年 | 井口夏子
井口夏子 |
| 【佳作】 | 雪山にボス猿一人尻赤し
雪女もファッション好みミニ姿 | 池田亮二
池田亮二 |
| 【佳作】 | 時雨きてサンタはテント欲しげなり
掛乞ひに傾向と対策役立たず
臘八や聖書コーラン阿呆陀羅経 | 伊藤浩睦
伊藤浩睦
伊藤浩睦 |
| 【佳作】 | 炬燵とて触れないものにふれてみて
余生とはもうけ物かと冬董 | 稲沢進一
稲沢進一 |

【佳作】	「よい年を」交わす人にはまた出会ふ 鍋奉行二人になりて乱れる具	井野ひろみ 井野ひろみ
【佳作】	誇らしく万両目立つ古家かな 喜寿迎え今年限りの賀状かな	入江澄泉 入江澄泉
【佳作】	世間話か寒明の庭の鳩 姫達磨駆け出す伊予の師走かな 座敷童子よ年賀状の吾が猫は	上山美穂 上山美穂 上山美穂
【佳作】	はうれん草赤きが好きと言へば茎 梅が香や東風の音聞く馬の耳 剃刀の刃先冷たし鼻の下	氏家頼一 氏家頼一 氏家頼一
【佳作】	実南天なり雪の日の子等の鼻 新春の空を切り裂き鳶の笛 巨木には父の温もり山眠る	梅岡菊子 梅岡菊子 梅岡菊子
【佳作】	平凡であるがむづかし年の暮 お雑煮の味の手抜きを子に言はれ 豆よりも風に追はれる鬼やらひ	越前春生 越前春生 越前春生
【佳作】	悪童も今日は神妙青写真 年始酒立てひざとなる和尚かな	大澤酒仙奴 大澤酒仙奴
【佳作】	数へ日のまだある儲け話かな ご利益も残って居らぬ六日かな 鮫鰯の口に満ちたるダークマター	小川鈍太 小川鈍太 小川鈍太
【佳作】	コンビニは明るきままに去年今年 海老チリの辛さ記せり初日記	奥脇弘久 奥脇弘久
【佳作】	風邪気味の二声三声明け鴉 投函の小銭の音も寒々し 秘々秘々と嗤ふ妖怪年わすれ	笠 政人 笠 政人 笠 政人
【佳作】	冬座敷茶筌の音に耳澄ます おせち抱きをり渋滞の渦の中 海峡や波の背中に雪が降る	加藤澄子 加藤澄子 加藤澄子
【佳作】	歯医者が歯診て貰ひをり大晦日 酒の座となりマスク取りよく喋る	加藤 賢 加藤 賢

【佳作】	用事なくいそいそ歩く年の暮れ 浪曲や親思い出す年の暮れ 歩くだけ句碑を訪ねて年の暮れ	門屋 定 門屋 定 門屋 定
【佳作】	友垣や二世に分かれ忘年会 冬ざれや葬儀にもある大安売	金澤 健 金澤 健
【佳作】	歳晩や這ひ蹲って拭き掃除 マンションに仏壇馴染みまず年明くる 初老の子と口論の末初笑ひ	川島智子 川島智子 川島智子
【佳作】	妙齢に席譲られし初電車 眉唾の政策を聴くおでんかな 探梅や笑顔優しく返されし	菅野あたる 菅野あたる 菅野あたる
【佳作】	マフラーや首はどこかと聞き給ふ 言ひ訳の口と鼻から息白し	久我正明 久我正明
【佳作】	雪富士を背負うて走る山の神 大袈裟な箱おほげさな室の花	工藤泰子 工藤泰子
【佳作】	うっかりとマスクしたまま鼻をかみ 灰いろの雲より白い雪の降る	小泉花子 小泉花子
【佳作】	ぺらぺらと口のしまらぬ白障子 鑑識は歯型見つめて焼芋食ふ	小林英昭 小林英昭
【佳作】	神主は子の名の予習七五三 淑女なる姿は何処歌留多会 天下取るごとくにかざす大熊手	酒井鹿洋 酒井鹿洋 酒井鹿洋
【佳作】	今日も又雪かき励み福積もる ふくれ餅福福しいとふくらむよ 雷鳴と頭耳なりおおこわい	佐藤義子 佐藤義子 佐藤義子
【佳作】	羊の親子鳴き交ふ鳥居初詣 冷凍庫整理し冬至の鰻かな クリスマスカード羽音届きけり	佐野萬里子 佐野萬里子 佐野萬里子
【佳作】	地獄絵をマスクはずして眺めけり 天敵のマスクと眼鏡かけてみる 香しき糞踏むこともお元日	下嶋四万歩 下嶋四万歩 下嶋四万歩
【佳作】	取り巻かれ監禁となるサンタかな	壽命秀次

	妻低気圧炬燵に猫が先づ感知	壽命秀次
【佳作】	三が日だけの我が世を満喫す 木枯に背中押されて縄のれん モノクロの初夢何故かほろ苦い	白井道義 白井道義 白井道義
【佳作】	増税据え置き冬草にはまだ黙ってしよう 誰かれ振り向くまでバーゲンの旗	鈴木和枝 鈴木和枝
【佳作】	知恵ついて風邪で休むと言う子かな 二日酔い確かめている初鏡 御降と聞いて子供は服を見る	高田敏男 高田敏男 高田敏男
【佳作】	恋患ひならぬ大寒声患ひ 保険買ふ如く迷うて十年日記 寒卵いつまでたつても卵かな	高橋きのこ 高橋きのこ 高橋きのこ
【佳作】	仏の座七つのチャクラの見まほし 寒灯や老いた占ひ師をるなる どうていやしむそさんばかりそろへる	田中 勇 田中 勇 田中 勇
【佳作】	風邪引きて元彼戻るハスキーに 毎年を求めて三年日記かな 初鏡皺苦茶婆が大写し	田中早苗 田中早苗 田中早苗
【佳作】	そろそろと話切り出すおでん酒 抱擁の歓喜セーター知ってをり 正直に書かぬ日もある日記果つ	田村米生 田村米生 田村米生
【佳作】	新年会アルコール抜きすぐ仕事 坂道を登りきりても温もらず 初泣きに大人も仲間に入れてよね	津田このみ 津田このみ 津田このみ
【佳作】	書き初めや波しずまらず墨を摺る あれこれと欲を呟く初詣 古館の語る言葉や雑煮食ぶ	土屋泰山 土屋泰山 土屋泰山
【佳作】	梟や真犯人は別にいる 底冷えや厠へ小股前のめり 贈られて少し寂しきちゃんちゃんこ	都吐夢 都吐夢 都吐夢
【佳作】	杖ついて殿につく福詣 雪降れば大の字を書き山眠る 適量を忘れて仕舞ふ年忘	飛田正勝 飛田正勝 飛田正勝

【佳作】	鎌倉の大仏歩きだす余寒 一回も縫はぬにさびし針供養 犬ふぐり嗅ぎゐる犬を曳きずりて	永島董玉 永島董玉 永島董玉
【佳作】	牛よお前は暇さうだなア年の暮 咳が出て逃げもかくれも出来ませぬ あんた誰帽子襟巻大マスク	新島里子 新島里子 新島里子
【佳作】	しばれると岩手の漢千昌夫 寒椿三原山からはるみ節	西をさむ 西をさむ
【佳作】	宝船願いの重さにあっふあふ 表裏とも活字の賀状に一句添え 寄せ鍋に皆で乗り込みあった丸	花岡直樹 花岡直樹 花岡直樹
【佳作】	初昔屋根とふ屋根に魚の骨 片付けば家も心も枯野かな しばれるや歯を顎はにし豚饅頭	原田 曄 原田 曄 原田 曄
【佳作】	日向ぼこ天下国家を論じをり 風邪声や鬼の役なる課長殿 綿虫に追ひ抜かれたり夕まぐれ	ひがし愛 ひがし愛 ひがし愛
【佳作】	煤逃げに入院といふ手もありぬ 折角のイケメンマスクして回診 厄払ひに乳房一つ差し上げる	久松久子 久松久子 久松久子
【佳作】	型通りてふ幸せや年賀状 福引をくるりぼろりん残念賞	日根野聖子 日根野聖子
【佳作】	美しさありて歌えるありのまま 冬の日や亀には亀の愁いあり まっいいか日向をつたう隠居猫	平戸良治 平戸良治 平戸良治
【佳作】	富士峰を鞍とまたがり初茜 いたずらか魚拓かみつく嫁が君 角隠す一夜吹雪の雪だるま	藤岡蒼樹 藤岡蒼樹 藤岡蒼樹
【佳作】	年の暮たまるポイントまだたまる がぶりつく年末ジャンボハンバーグ タブレットから福引もおみくじも	藤森荘吉 藤森荘吉 藤森荘吉
【佳作】	聞きたい事山ほどもあり初日かな	藤原セツ子

	風花の一ひらを乗せ落葉かな 床の間の松に添へられ長春花	藤原セツ子 藤原セツ子
【佳作】	また一年生き延びるかや初詣 年始から刺激五体にボケぬやう 正月やめでたさ何処へ行ったやら	細川岩男 細川岩男 細川岩男
【佳作】	玄関の大南天やほめらるる 包丁を持たざり祖母の雑煮汁 新巻の届いて祖母の雑煮かな	松井寿子 松井寿子 松井寿子
【佳作】	銘酒入れ機嫌よし聖夜の冷蔵庫 絶望名人カフカと同衾寝正月 窓に残す手形口形雪女	松井まさし 松井まさし 松井まさし
【佳作】	つぶれさうでつぶれぬ店や日脚伸ぶ 三が日終へれば主婦こんにやく化 五右衛門の凧ブリキアに絡まれる	三橋百笑 三橋百笑 三橋百笑
【佳作】	数の子も屑数の子で数知れず まづ屠蘇を交し商談持ちかけり	宮森 輝 宮森 輝
【佳作】	振出をひきし双六お元日 小豆粥父の威張りし昭和かな 健さんも文太も逝きぬ冬花火	百千草 百千草 百千草
【佳作】	思いきり打ち出されおり除夜の鐘 起き上がり転ぶものあり網の餅 餅搗きや小さな手にもなでられる	森岡香代子 森岡香代子 森岡香代子
【佳作】	正確に言へば昏睡眠る山 鎌鼬動物図鑑のどのページ 正月や三日坊主を始めたる	八木 健 八木 健 八木 健
【佳作】	横顔は猪木寛至や月今宵 年玉を高利貸する幼かな	谷澤紀男 谷澤紀男
【佳作】	独楽廻し独り舞台の独演会 逃げ水やおいてけぼりの錦糸堀 男体も女体もありて山笑ふ	八洲忙閑 八洲忙閑 八洲忙閑
【佳作】	お年玉太子願ひを聞き届け 酩酊の面赤らめて喧嘩独楽 晴れてなほ思案投げ首雪達磨	柳 紅生 柳 紅生 柳 紅生

【佳作】	初夢は病肢に登る大蛇かな 節料理みなが持寄り目を皿に 八十路来て味腕自慢蕪漬	柳澤京子 柳澤京子 柳澤京子
【佳作】	おひさまのぬくもり詰めた掛布団 輝ける紅葉仏の息吹かな 落葉敷先の拓けし風の道	山下正純 山下正純 山下正純
【佳作】	上下の険急接近の足炉かな でんと構える仏壇の土佐文旦 小掃除や未の年を迎えたる	山本けい子 山本けい子 山本けい子
【佳作】	奇跡は起こることなかつた初鏡 ビル街の長方形の寒夕焼	山本 賜 山本 賜
【佳作】	また同じ話題となりて日向ぼこ お前もかのらりくらりと冬の蠅 この年の前途占ふ姫始め	横山喜三郎 横山喜三郎 横山喜三郎